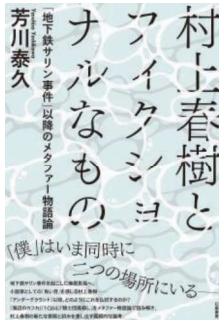


【自著紹介】 芳川泰久『村上春樹とフィクショナルなもの

——「地下鉄サリン事件」以降のメタファー物語論』

(幻戯書房 2022年2月)



本書は『ねじまき鳥クロニクル』と『海辺のカフカ』に兆すリアリズムへの姿勢の違いを視野に入れながら、『アンダーグラウンド』巻末の「目じるしのない悪夢」に着目した。そこで村上春樹は、麻原彰晃が「地下鉄サリン事件」をいわば二度目の「阪神大震災」と見なしていて、前者は後者の「結果的なメタファー」だととらえている。作家はこの事件を企てた麻原のうちに「小説家としての読み」を感じとったのではないか。「地下鉄サリン事件」を第二の「阪神大震災」として起こす思惑のうちに、小説家の用いる方法と同質のものを村上は見抜いている。そのことが「目じるしのない悪夢」に敗北感のような空気を漂わせ、「麻原の差し出す荒唐無稽なジャンク物語」を「放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語」の必要性をこの作家に力説させたように思われる。そして『海辺のカフカ』以降の長篇小説（本書執筆時点で書かれていたのは『騎士団長殺し』まで）の物語構築に、どのように「結果的なメタファー」という視点が関わるのか、それを本書は探査している。

「結果的なメタファー」の「結果的な」には、時間差をはさんだ反復が含意され、何かを別の何かに託して表現する「メタファー」のうちには、意味のバイアスが想定される。フロイトが『快楽原理の彼岸』で紹介した幼児の「糸巻き」遊びを精神分析臭のないかたちで参照すれば、母親の不在時に行われるこの遊びでは、視界から消滅した〈母親〉を、ベッドの柵の向こうに投げ捨て見えなくした〈糸巻き〉に擬し、メタファー関係が成立するのだが、つづいて、視界から消えた〈糸巻き〉を幼児が引っ張りもどして嬉しそうに手にするとき、そこに幼児の期待や願望としての〈母親〉の帰還・再来が託されている。それがメタファー関係から生じる意味のバイアスとかモーメントにほかならない。

三作の長篇では、さまざまにメタファー関係のネットワークが布置されているが、そのどれにも、主人公（主要人物）の最愛の存在の消滅や不在が、メタファー関係にある別の存在の帰還や再来として物語られていて、そこに意味のバイアスが使われている。『海辺のカフカ』では、主人公の母親の消滅が佐伯さんとして再来し、『1Q84』では、天吾の母親の消滅が青豆の再来として語られ、『騎士団長殺し』では、秋川まりえの消滅と再来が主人公の妻ユズの不在と帰還に重ねられている。

本書の後半では、これら長篇三作の物語構築に、どのようにメタファー関係が用いられているかを詳細に分析した。『海辺のカフカ』では、『ねじまき鳥クロニクル』に刻まれた「ここは区営

プールでありながら井戸の底」でもあるという量子論的な世界観（それはリアリズムを破綻させかねず、『ねじまき鳥クロニクル』を『海辺のカフカ』以降の三作と別つ指標になる）が、カフカ少年はずっと高松にいたまま夜の四時間ほどで東京・中野にいるその父親を殺せるのか、という不可能性として変奏されているが、その問題に小説家は、カフカ少年とナカタさんのあいだに成り立つメタファー関係を用いて対処している。殺害の場面の描写では、ナカタさんが否応なく一人でその男にナイフを突き立てているのに、それをナカタさんが物語の終わりで佐伯さんを前に語る時（その語りこそ殺害場面の反復である）、自分はその現場に「いたはずの15歳の少年のかわりに」男を刺殺したと告げていて、同じ人間は同時に異なる場所に存在できないというリアリズムの不可能性（繰り返すが、『ねじまき鳥クロニクル』ではこれをそのまま曖昧にしていた）を、二人のメタファー関係を用いること（描写と語りの技術）によってなんとか回収し、物語として成立させている。

『1Q84』では、そうした不可能性は小説内小説（『空気さなぎ』）から物語に浸透した「二つの月」として変奏されているが、同じ仕草・動作の反復によって成り立つメタファー関係から生じる意味のバイアス（モーメント）を用いた物語構築の方法が実践されている。ともに「右手で強く左手を握る」ふかえりと青豆のメタファー関係から生まれるモーメントを利用して、作者は、天吾と前者のあいだでなされている性交が天吾と後者の性交へとつながるように物語を誘導している。同じように、初秋、「二つの月」を同時に別々に公園の滑り台から見る天吾と公園の後方のマンションの部屋から見る青豆が、「十歳の時」の教室でともに「同じ月」を「手をしっかりと握りながら」見ていたと天吾の記憶のなかで重ねられ、メタファー関係がその二つの場面のあいだに成り立つのだが、作者は、そこから生じるモーメントを用いて、二人が手を握って月を見る大団円の場面へと動線を引いている。さらに作者は、滑り台から月を見る同じ動作を天吾と牛河に用意し、そこから生じる意味のモーメントを利用して、その場面を目撃した青豆を天吾の居場所へと導く。

『騎士団長殺し』では、雑木林の祠の裏の石室の「穴」を介してメタファー関係にある騎士団長と秋川まりえのあいだに、消滅と出現の物語（メタファー・ゲーム）が育まれることを指摘したが、最大のメタファー関係は、「蓋」を超える仕草と「鈴」を鳴らす動作の共有により「騎士団長」と「私」のあいだで成立する。そこから生じる意味のモーメントに促されるように、「私」は騎士団長と同じく閉じ込められた「穴」から脱出し、帰還することになる。

本書の冒頭の章では、かつてなされた大江健三郎による村上批判を、小説家が大江の「泳ぐ男——水のなかの「雨の木」」のプールで泳ぐくだりをなぞるように『ねじまき鳥クロニクル』（第2部・18）を書き、そこで大江とは真逆のフィクショナルな方向に主人公を踏み出させている（それは小説の実践による批判返しでもある）ことに注目した。そして末尾の章では、『ねじまき鳥クロニクル』の英訳版から、量子力学的な世界観の横溢する場面（「区営プール」にいながら同時に「井戸の底」にもいる）の収まる章が削られていて、そのことは単なる冗長性の処理ではなく、リアリズムの破綻につながる痕跡の抹消という見方ができると指摘した。

【芳川泰久（フランス文学・文芸批評）】